

## ごミサの心と形

-見えるものから見えないものへ、見えないものから見えるものへ-  
（「感謝の典礼」の部分を中心に）

酒井俊弘（オプス・デイ属人区司祭）

私たちはミサに与ることには慣れていますが、けれども、そこで使われる物や言葉や動作の持つ意味を理解しているのでしょうか。それとも、単に習慣的に繰り返しているだけなのでしょうか。過越しの神秘を記念しているミサについての知識を深めることを通して、過越しの神秘を思い起こす復活祭の準備をしましょう。

### 1. ミサで使用される物の意味

- a) 祭壇：なぜ司祭は祭壇に向かって礼をするのですか？
- b) 聖櫃：ミサ中にも、前を横切るときには礼をするべきですか？

### 2. ミサにおける姿勢や動作の意味

- a) 手の動作：十字架のしるしと手の合わせ方はどのようにしますか？
- b) 礼（礼をする・頭を下げる）：いつ礼をしますか？
- c) 聖体拝領：手の出し方はどのようにしますか？いつ礼をするのですか？

### 3. ミサに唱える言葉の意味

- a) 「また司祭とともに」：五回唱えているこの言葉の意味は何ですか？
- b) 「アーメン」：何度も唱えるこの言葉の意味は、それぞれ違うのですか？

### 4. ミサ中の沈黙の意味

何回沈黙の機会がありますか？それにはどんな意味があるのですか？

### 5. 感謝の典礼

#### 供えものの準備

- a) 供えものの準備（奉納行列）と奉納：この間、会衆は何を心がけるべきですか？
- b) 奉納祈願前の祈りへの招きと会衆の答え：声に出して答えるべきですか？

#### 奉献文

奉献文の多様性：いつも同じ奉献文でいいのですか？

#### 交わりの儀

- a) 主の祈り：なぜ「アーメン」を言わないのですか？
- b) 教会に平和を願う祈り：「教会のため」だけなら利己的でないのですか？
- c) 聖体の授与：最近の変更点とその意味は何ですか？

## 1. ミサで使用される物の意味

### a) 祭壇：

ミサ中は「キリストそのもの」であり、中心。司式者は奉仕者と共にまず一礼し、さらに（両手を祭壇に付けて）深く一礼する。その後、祭壇奉仕者や朗読奉仕者は移動に際して、祭壇に向かって礼をする。

### b) 聖櫃：

ミサ中は、基本的には礼をしなくてよい。中心ではないから（総則 274）。

## 2. ミサにおける姿勢や動作の意味

### a) 手の動作：

過敏になる必要はないが、所作は①全体との一致と②動作の意味とを考え意識。

「すべての参加者が共通の姿勢を守ることは、典礼のために集まったキリスト者共同体の成員の一致のしるしである。それは、参加者の心情の表現であり、また心情をはぐくむものだからである。」（総則 42）

### b) 礼：合計 5 回以上

①信条の「おとめマリアから生まれ」「おとめマリアよりからだを受け」のところで深い礼（総則 137）。

②聖別後に司祭が深い礼をするときに深い礼（総則 43）。

③「聖体に対する尊敬を表すために、手を合わせて一礼し、聖体を授与する奉仕者の前に立つ」（指針 4）

④平和のあいさつ「手を合わせて『主の平和』と唱えながら相互に礼をする」（総則：日本における適応）

頭を下げる：

①回心の際の告白の祈り（全能の神と、兄弟の皆さんに告白します…）は「手を合わせ、頭を下げて告白する」（ミサ典礼書該当箇所赤字註）

②司式者は、イエス、マリア、そのミサで祝う聖人の名を唱える時（総則 275）。

### c) 聖体拝領：

「片方の手のひらを上にし、その下にもう片方の手を添えて両手を差し出す」（『日本におけるミサ中の聖体拝領の方法に関する』指針 11）

## 3. ミサに唱える言葉の意味

### a) 五回：開式、福音朗読前、叙唱、平和のあいさつ、閉式。

「また司祭とともに」：本来は「またあなたの霊とともに *Et cum spiritu tuo*」。ミサにおけるキリストの現存の四段階。

①	キリスト信者が集うとき（マタイ 18, 20）
②	聖書が集会の中で読まれるとき（キリスト自身が語る）
③	秘跡を実現する司祭のうちに（ <i>in persona Christi</i> ）
④	聖体の形態のうちに（キリストの秘跡的現存）

「司祭はキリストとなって（*in persona Christi*）聖祭をささげるのです。これ

は、『キリストのみ名で』とか『キリストに代わって』とか言うよりももっと深い意味をもっています。『キリストとなって』と言うのは、『最高永遠の司祭』と特殊な秘跡的同化によってと言う意味です。』（聖ヨハネ・パウロ二世、書簡『聖体の秘儀と礼拝について』8）

b) 「アーメン」：（年間通常の主日ミサでは）合計 12 回

①開祭のあいさつ、②回心のゆるしの宣言、③集会祈願、④栄光の賛歌、⑤信仰宣言、⑥共同祈願、⑦奉納祈願、⑧奉獻文最後の栄唱、⑨教会に平和を願う祈り、⑩聖体拝領、⑪拝領祈願、⑫派遣の祝福。

・「ヘブライ語のアーメンは、『信じる』と同じ語源から派生しています。この語源には、堅固さ、信頼性、忠実という意味合いが含まれています。だから、『アーメン』という語は、わたしたちに対する神の忠実と神へのわたしたちの信頼とを表す際に使われるのです。」（『カトリック教会のカテキズム』1062）

・（奉獻文の最後のアーメン）「指導者が祈りと感謝を唱えた後、会衆一同は喜びを込めてアーメンと叫びます。」（同 1345 の聖ユスチノの証言）

・（聖体拝領のアーメン）「皆さんはいただくものに対してアーメン（まことにそのとおりです）と答え、そう答えながらそれに同意しているわけです。あなたはキリストのからだということばを聞き、アーメンと答えます。ですから、あなたのアーメンが真実であるように、キリストの肢体でありなさい」（同 1396 の聖アウグスティヌスの言葉）

#### 4. ミサ中の沈黙の意味

・（1回）回心の祈りの前：「しばらく沈黙のうちに反省する」（『ミサ式次第』）

・（1回）集会祈願の「祈りましょう」の後：「会衆は司祭とともにしばらく沈黙のうちに祈る」（同上）

・（1～4回）ことばの典礼の際：「ことばの典礼では、集まった会衆に合わせて短い沈黙のひとつときをとることが望ましい。それによって、聖霊に促され、神のことばを心で受けとめ、祈りをとおして応答を用意することができる。この沈黙のひとつときは、たとえば、ことばの典礼そのものが始まる前、第1朗読と第2朗読の後、また説教が終わってから適宜とることができる。」（『総則』56、『朗読聖書の緒言』28）  
「説教の後に、短い沈黙のひとつときがふさわしく守られる」（『総則』66）

・（0～1回）奉納祈願の前：祈りへの招きに対して「一同は司祭とともにしばらく沈黙のうちに祈る。次のような祈りをすることもできる」（『ミサ式次第』）これは、一同が祈りの言葉を唱えた後に沈黙の時間をとる…に改訂予定。（1）

・（1回）拝領後：拝領祈願の前「拝領後、一同は沈黙のうちにしばらく祈るか、または詩編か聖書の歌を歌うことがすすめられる」（『ミサ式次第』）、または後「沈黙の祈りがなかった場合、一同司祭とともにしばらく沈黙のうちに祈る」（同上）。

つまり、**現在は最低4回、最高8回**。（司祭はその他にもある。）

意味：「聖なる沈黙も、祭儀の一部として、守るべきときに守らなければならない。沈黙の性格はそれぞれの祭儀のどこで行われるかによる。回心の祈りのときと祈願

への招きの後には各人は自己に心を向ける。聖書朗読または説教の後には、聞いたことを短く黙想する。拝領後には、心の中で神を賛美して祈る。祭儀そのものの前にも、教会堂、祭具室（香部屋）、準備室とそれに隣接する場所では沈黙が正しく守られなければならない。こうして、聖なる行為が敬虔かつ正しく行われるよう、すべてが整えられるのである。」（『総則』45） 拝領後の聖なる沈黙（『総則』43）

## 5. 感謝の典礼

### 供えものの準備

#### a) 供えものの準備（奉納行列）と奉納：

「供えものの奉納を、ことばの典礼と感謝の典礼の『幕間』にすぎないものと考えてはなりません。（…）わたしたちが祭壇にパンとぶどう酒を運ぶことによって、あがない主であるキリストは全被造物を受け取り、造り変えて、父にささげます。こうしてわたしたちもまた、世のあらゆる苦難と苦しみを祭壇にささげます。（…）私たちは、神が初めから、ご自身のわざの実現に参加するよう人を招いていることを感謝することができるようになります。こうして神は人間の労働に真の意味を与えます。感謝の祭儀を通じて、労働はあがないをもたらすキリストの奉獻と結ばれるからです。」（教皇ベネディクト十六世『愛の秘跡』47）

#### b) 奉納祈願前の祈りへの招きと会衆の答え：

司祭：皆さん、（わたしとあなたがたの）このささげものを、全能の神である父が受け入れてくださるよう祈りましょう。

会衆：神の栄光と賛美のため、また全教会とわたしたち自身のために、司祭の手を通しておささげするいけにえをお受けください。

### 奉獻文

#### 奉獻文の多様性：

奉獻文	歴史	特徴
第一奉獻文	ローマ典文としてカトリック教会で長く使用されてきた。	使徒たちをはじめとし、初代ローマ教会に関係する聖人たちの名。生者と死者への沈黙の祈り。
第二奉獻文	ヒッポリュトスの『使徒伝承』が起源。	最も短い。特定の死者に言及できる部分。
第三奉獻文	第一と第二の長所を取り入れた現代的なもの。	聖霊への言及が多い。特定の死者に言及できる部分。
第四奉獻文	東方教会で古くから使われている大バシリウスの祈願を基礎にしたもの。	固有の叙唱付き。あがないの歴史を壮大に展開。

その他、「種々の機会のミサの奉獻文」「ゆるしの奉獻文」「子どもとともにささげるミサの奉獻文」などがある。

どの奉獻文を選択するべきか。総則 365 に以下の通りある。

「ミサの式次第における奉献文の選択は、次の基準によって行われる。

- a) 第1奉献文すなわちローマ典文は、いつでも唱えることができるが、固有の「全教会の交わりの中で…」が定められている日、もしくは固有の「わたしたち奉仕者と…」がある日、さらに奉献文の中に名前の出てくる使徒と聖人の祝祭、また司牧上の理由から第3奉献文が採用されるのでないかぎり、主日に用いるのが適当である。
- b) 第2奉献文は、その特徴から、週日または特殊な事情において用いるのが適当である。固有の叙唱を備えているが、他の叙唱、とりわけ救いの神秘をまとめて述べているもの、たとえば共通の叙唱とともに用いることができる。ミサが特定の死者のためにささげられる場合、該当の箇所、すなわち「また、復活の希望をもって…」の前に記されている特別な祈りのことばを用いることができる。
- c) 第3奉献文は、どの叙唱とともに用いることができる。主日と祝日には優先的に用いられる。この奉献文が死者のためのミサで用いられる場合、該当の箇所、すなわち「あなたの子がどこにいても…」の後に記されている死者のための特別な祈りのことばを用いることができる。
- d) 第4奉献文は、いつも同じ叙唱があり、救いの歴史のかなり完全な要約を備えている。固有の叙唱のないミサの場合、および「年間」の主日に用いることができる。この奉献文には、その構成上、死者のための特別な祈りのことばを入れることができない。」

つまり、主日は「①第3または第1、②年間主日なら第4も可」の優先順。

### 交わりの儀

- a) 主の祈りの「アーメン」:

主の祈りの副文について。『国と力と栄光は、あなたのもの〔だから〕です』という結びの栄唱は、御父に向かって、み名が聖とされること、み国が到来すること、万物救済というみこころが実現されることを祈り求めている、初めの三つの願いを、包括的に繰り返すものです。』（『カトリック教会のカテキズム』2855）副文が「アーメン」の代わりに祈りをまとめているため。

- b) 教会に平和を願う祈り:

主の祈りの副文の中で「現代に平和をお与えください」とすでに祈っているから。この箇所で願っている教会における平和とは、教会一致（エキュメニカル）のこと。

- c) 聖体の授与：最近の変更点とその意味

- ・ 拝領のときの姿勢：立って拝領する。
- ・ パンの拝領の方法：手で受けるか口で受けるか選ぶことができる。円滑に流れるように配慮するとともに、聖体に対する尊敬を欠く行いをしないよう指導する。
- ・ 授与するときのことば：「キリストの御からだ」「キリストの御血」